

渡戸氏の「武士道」の中で「義」について以下のように述べている。

義は武士の掟中最も厳格なる教訓である。武士にとりて卑劣なる行動、曲がりたる振舞いほど忌むべきものはない。

「義」の精神は決断力であり、人としての道徳・倫理に照らして正しい行いをする際に逡巡してはならず、絶対命令であるべきなのである。どのように能力があろうとも、どんなにずば抜けた実績があろうとも、「義」のない人間は卑怯者であり、世に立つことはできない。正しき行いを心掛けていなければ、必ずどこかで足をすくわれる。

「勇」は勇気である。孔子の「論語」には「義を見てなさざるは勇なきなり」と説かれているが、新渡戸氏の解釈を引用すれば「勇とは義(ただ)しき事をなすことなり」である。起業家や経営者には「勇」が必要である。リスクを犯して事業を推進してい限り、「勇」がなければ大成しない。

「勇」といえば、「大勇(たいゆう)」と「匹夫(ひつぷ)の勇」が挙げられよう。「大勇」とは大事にあたって出す本当の勇気の事であり、「匹夫の勇」とは思慮が浅く、血気に任せて行動したがるだけの勇気を指す。

「勇」ある経営者にとって、経営とは知的競技である。「義」というルールに従い、正しい経営を行っていれば命までとられることはない。窮地に陥って、思考を止め、諦めてしまうことは怠け者のする行為であり、「勇」のないものとする行為である。

武士の情けと呼ばれるものは「仁」から生じる。

「仁」とは己に厳しく、人にやさしくする心であり、愛、寛容、同情などがこれにあたる。「仁」は「王者の徳」として、孔子や孟子も人を治める者の最高の必要条件は「仁」と主張している。孟子曰く

不仁にして国を得る者はこれ有り、不仁にして天下を得る者はいまだこれ有らざるなり」と。

残念ながら織田信長には「仁」がかけていた。敵に限らず味方にさえも非情であった彼の天下統一という夢が叶うことはなかった。

経営者にも「仁」が必要であろう。社員は利益を稼ぐための道具ではない。経営者にも夢があるように、社員にも夢がある。経営者はビジョンを示し、共通の夢を叶え目標を一丸となって達成できるよう社員達を導かなければならない。

伊達政宗は盲目的な愛に溺れること、厳格なる正義に固執する事を戒め、「仁に過ぐれば弱くなる、義に過ぐれば固くなる」という遺訓を残している。

経営者もこのあたりのバランス感覚を身につけなければならない。

「義」に従い、「勇」をもって挑戦し、「仁」によって治める。

日本人の魂の中に、きっとどこかに武士道は根付いていて、これから先も日本人の美意識のように残ってほしいと願う。